



NEW OTANI ART MUSEUM

2010年1月

# 安田靫彦展 花を愛でる心

## YASUDA Yukihiko



2010年3月13日(土)~4月18日(日)



《紅花青花》1951(昭和26)年 横浜美術館蔵(山口和宏氏寄贈)

【本件に関するお問い合わせ】

ニューオータニ美術館

〒102-8578 東京都千代田区紀尾井町4-1 ニューオータニガーデンコート6F

TEL 03-3221-4111 ・ FAX 03-3221-2988

<http://www.newotani.co.jp/museum>

E-mail: [museum@newotani.co.jp](mailto:museum@newotani.co.jp)

○ニューオータニ美術館（千代田区紀尾井町4-1 館長 大谷和彦）では、2010年3月13日（土）より4月18日（日）まで「安田靫彦展－花を愛でる心」を開催いたします。

○安田靫彦（1884-1978）は、明治・大正・昭和の三代にわたり活躍した日本画家です。歴史画や静物画において理知的な造形による清新な作風を展開し、日本美術院の指導的な立場にあり続けました。

○靫彦が終生梅樹を愛し、数多く描き出したことは広く知られています。梅をはじめとする四季折々の花木は、歴史画にも取り入れられました。画家が描き出す人物の周囲には、さりげなく草花が配され、あるいは花木と密接なかかわりを持つ伝説的な人物像が制作されています。

○本展では、人物と自然の親交を示す歴史画をはじめ、特に愛情を注いだ梅や四季を彩る花木を展示いたします。あわせて、その制作のために日常的に行われた川崎市市民ミュージアム所蔵の写生類を展覧し、靫彦の自然に対する親密な心と表現をご紹介します。

○なお、本展と同時期に川崎市市民ミュージアムでも「安田靫彦展－歴史画誕生の軌跡」を開催いたしておりますので、ぜひご鑑賞ください。

## 展覧会概要

- 1) 展覧会名称 安田鞞彦展 - 花を愛でる心
- 2) 会 期 2010年3月13日(土)～4月18日(日) 稼働日数 32日
- 3) 主 催 ニューオータニ美術館
- 4) 協 力 安田建一、川崎市市民ミュージアム
- 5) 会 場 ニューオータニ美術館  
東京都千代田区紀尾井町4-1 ニューオータニガーデンコート6F  
Tel:03-3221-4111 Fax:03-3221-2988  
(東京メトロ 銀座線・丸の内線「赤坂見附」駅D出口、有楽町線・南北線・半蔵門線「永田町」駅7番出口よりいずれも徒歩約4分)
- 6) 開館時間 午前10時～午後6時(ご入館は午後5時30分まで)
- 7) 休 館 日 月曜日(ただし3/22は開館)、3/23
- 8) 入 館 料 一般¥800、高大生¥500、小中生¥300  
宿泊者無料、20名以上の団体は各¥100割引  
川崎市市民ミュージアムの「安田鞞彦展－歴史画誕生の軌跡」の入場券の半券を提示されると¥100割引で入館いただけます(他の割引との併用不可)。
- 9) ギャラリートーク 3/27、4/10の土曜日 午後2時より 当館学芸員
- 10) 作品点数 約80点

## 展覧会構成

### I 歴史画

安田靉彦は、その歴史画において史上の人物を、時に緊張感の漂う状況下に、時に静穏な時間の中に描き出しています。それらは、歴史に足跡を遺した人々あるいは神話や物語の登場人物に対する画家の強い憧憬が生み出したものです。画家の心を揺り動かした人々は、流麗な線、みずみずしい色彩によって新たな命を吹き込まれ、鑑賞者の眼前にその姿を現しています。画中には多くの場合、描かれた人物と関わりの深い草花が配されており、古来より人の歩んできた道のりが、自然と深く交わるものであったことに気付かされるとともに、人と草花との密接なつながりに留意する画家の心情をうかがい知ることができるのです。

本章では初公開となる《八橋》をはじめとする約10点を展示します。



#### 初公開作品

やつはし  
《八橋》1934(昭和9)年、絹本彩色/軸、  
130.5×41.9cm、  
草舟コレクション



きくじどう  
《菊慈童》1939(昭和14)年、紙本彩色/軸、  
82.3×94.1cm、五島美術館蔵



らふせん  
《羅浮仙》大正時代初期、絹本彩色/軸、  
125.0×55.7cm、個人蔵

## II 花木

安田靫彦は、花や器をモチーフとした静物画にも優れた作品を遺しています。若い頃から歴史画の背景として花や樹木を描いていましたが、昭和に入る頃からは花や器物を独立させて描くようになりました。病弱のため、常に身体をいたわりながら制作しなければならなかった画家にとって、自宅周辺や屋内で存分に向き合うことのできる対象に熱中するのは、自然な成り行きであったのでしょうか。多くの写生を行うことで対象を的確にとらえる観察眼を養いましたが、作品化する際には、写生的な生々しさを取り除き、静ひつで気品に満ちた静物画を描き出しました。写生から本画にいたる道程に、靫彦という画家の個性が端的に示されるのです。

本章では、制作のための下図やスケッチを含む約 40 点を展示します。



しゅんぎょう  
《春暁》1935(昭和10)年、紙本彩色/軸、  
62.3×82.3cm、大谷コレクション



こうかせいか  
《紅花青花》1951(昭和26)年、  
紙本彩色/軸、47.7×60.7、  
横浜美術館蔵(山口和宏氏寄贈)



こうらいへんこへい  
《紅梅高麗扁壺瓶》1961(昭和36)年、紙本彩色/額  
66.3×81.5cm、株式会社 明治座

### Ⅲ 写生画

安田鞞彦の写生の多くは、鉛筆に淡彩で描き出されています。しっかりとした線で対象を把握できる鉛筆を用い、写し取った植物の形や色を補足する書き込みをしていることから、後々の制作のための覚え書き的な要素が強いようです。とはいえ、私たちが日常的に目にする植物の特徴が、簡略な筆致の中にも見事にとらえられていることが分かります。

最も多く描いたのは、鞞彦が終生愛した梅です。1929（昭和4）年に大磯の地に新居を構えてから、自宅の庭に移植し、大切に手入れした梅を、紅白の可憐な花、年月を感じさせる幹、複雑な枝振りなど様々に描き出しています。野草ではあざみ、山百合、桔梗、おみなえし、萩などを好んで描きました。自宅の裏山に自生していたことから写生に適していたのでしょう。画家の写生約30点を展示します。



《菖蒲》37.2×25.5cm



《あざみ》35.8×42.8cm



《朝顔》36.6×51.6cm



《桜》62.3×82.3cm



《白梅》37.1×56.6cm